

旧大乘院庭園の調査

—第352次・第365次

1 はじめに— 調査の経緯と経過

平城宮跡発掘調査部では、本庭園を管理する(財)日本ナショナルトラストの委嘱を受け、復原整備に向けた資料を得るため、1995年から毎年継続的な発掘調査を実施してきた。これまでの調査は、近世における大乘院庭園の姿を明らかにすることを目的として、東大池の周囲を中心に南岸から東・北岸へと進めてきたが、第310次調査からは東大池西岸部を対象としている。文献・絵図による研究から、この地区には御殿にともなうて数寄を凝らした庭園が整備され、近代にいたるまで大乘院庭園の中核を形成していたこと、変化に富んだ景観をもつ「西小池」が存在したことが知られていた。しかしながら、建物はすべて失われ、西小池も明治の前半には埋め立てられており、発掘調査による実態の解明が期待された。

第352次調査(平成4年度)は、西小池(南池)の想定地および東大池西岸の築山を、第365次調査(平成15年度)は、東大池西北隅および西南隅を主たる対象とした。

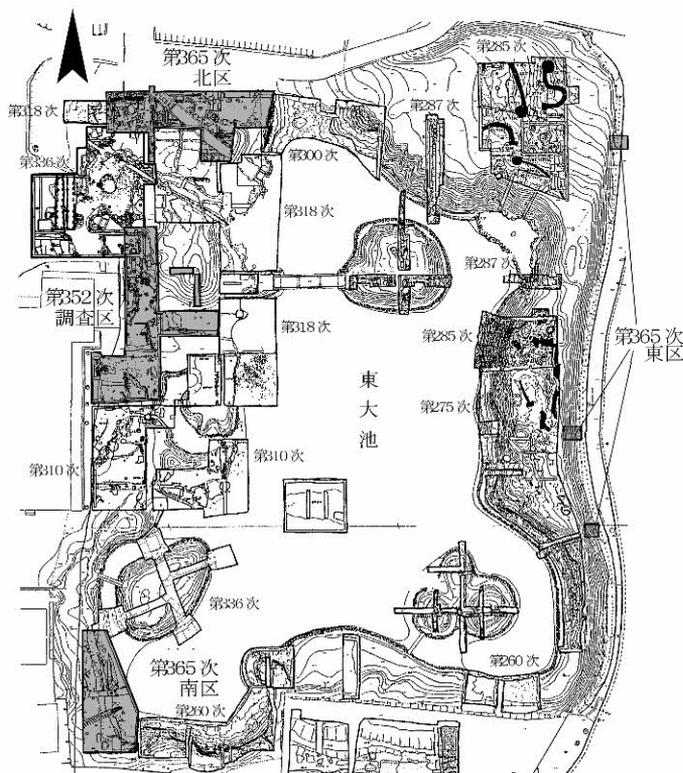


図164 第352次・365次調査区位置図

また、東大池西岸部の調査では、『大乘院四季真景図』(興福寺蔵、以下『真景図』、図165)や『大乘院殿境内図』(宇賀志屋文庫蔵、以下『境内図』、図166)など近世に描かれた絵図、あるいは昭和14年に『庭園』・『風景』誌に紹介された平面図と重ね合わせることで、検出遺構の比定、あるいは発掘前の推定を試みている。

2 大乘院と 大乘院庭園

大乘院は、一乗院とならび両門跡とよばれた興福寺の門跡寺院である。平安時代にはじまり、当初は興福寺の北方現在の奈良県庁のあたりにおかれたが、治承4年(1180)、平重衡による南都焼き討ちによって罹災したため、元興寺の別院である禅定院のおかれていた鬼窟山(飛鳥山)の南麓に移り、ここを大乘院家と定めた。

宝徳3年(1451)の徳政一揆による焼亡後の復興では、尋尊大僧正によって、建物ばかりでなく庭園についても精力的な整備が行われ、南都随一の名園となる。このとき園池の造営にあたったのは、名匠とうたわれた善阿弥親子で、善阿弥は足利義政に仕えて銀閣寺の園池を造ったとも言われている。室町時代の整備では、東の大池の北と南にある中島に西側から橋を架けたり、大池の西側にあらたに小池がつけられたりしたことが知られている。室町時代に改修された庭園の基本的な姿は、江戸時代のはじめまで続いたと考えられており、江戸時代の大乗院の姿は、第15世隆温大僧正の描かせた『真景図』からうかがい知ることができる。

明治維新をむかえ大乘院は廃絶、敷地の大部分は休閑地となり、御殿の一部は個人宅に転用された。明治7年には門跡松園氏宅(内御殿・東林院殿)に更新舎小学が開設される。明治8年には元興寺極楽院にあった研精舎と合併して鶴小学校となり、鶴小学校は、明治16年御殿を取り壊して新築された飛鳥小学校へと移る。飛鳥小学校は、現在の紀寺町に移転する明治33年までこの地におかれていた。また、明治20年頃には荒池の造成にともなうて、東大池の北側に掘割を開削している。

庭園北側の奈良ホテルは、当初関西鉄道が建設にあたる予定であったが、国有鉄道法施行により関西鉄道が国有化、ホテル建設は鉄道院(旧国鉄、現JR)に引き継がれ、明治42年(1909)に開業する。大乘院跡地も鉄道院の所有となった。

(次山 淳・金井 健)



図165 『大乘院四季真景図』(興福寺蔵) 部分

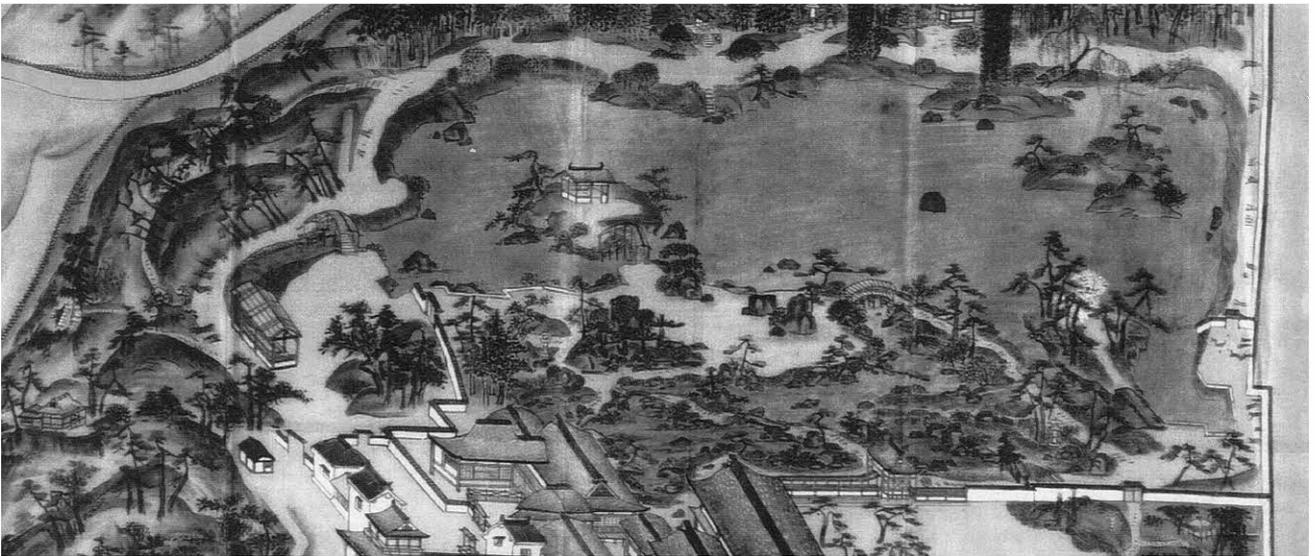


図166 『大乘院殿境内図』(宇賀志屋文庫蔵) 部分

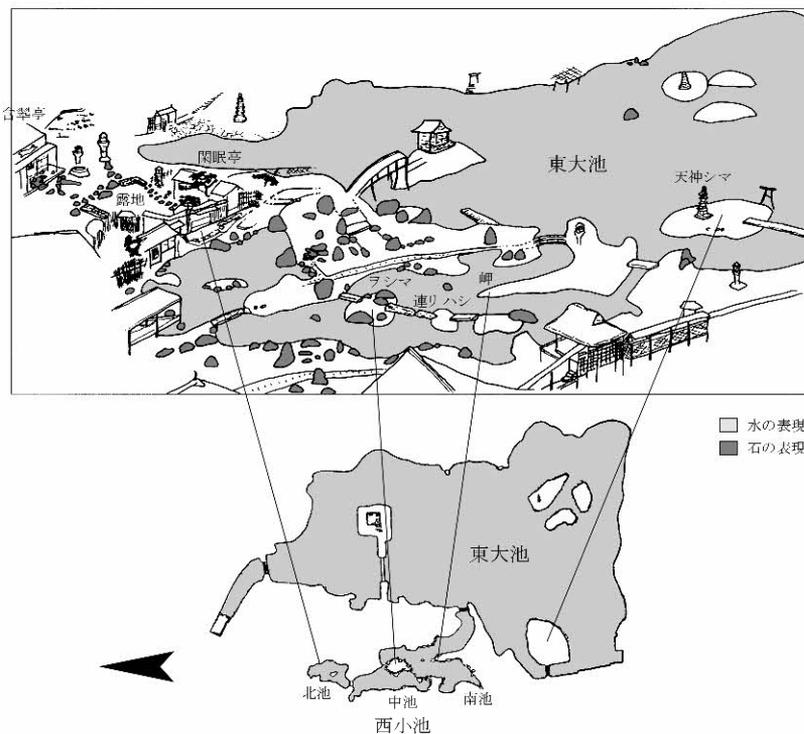


図167 池の名称と『真景図』の対照
 ※下は、『風景』第6巻第3号(1939)所収の図をもとに作図

3 第352次調査

第352次調査は、西小池(南池)の想定地および東大池西岸の築山を対象に、2003年1月7日から開始し3月12日に終了した。調査面積は267.5㎡である。調査区は、第336次調査区の東南隅と一部重複し、第310次調査区の北辺までをつなぐ位置にあたる(図68)。

『真景図』および『庭園』第21巻第3号(1939)で田村剛により紹介された『興福寺舊大乘院庭苑圖』(以下『庭苑圖』)によれば、今回の調査地には、西小池南池の北岸および東岸、『真景図』に「ヲシマ」と記された中島の東半部、および「ヲシマ」から「連リハシ」によって結ばれた小島と対岸部、東大池と西小池を結ぶ流路の西岸にあたる嘴状の岬などが存在するものと考えられた。

基本層序

調査区内の層序は、表土、調査区西側にある旧国鉄の宿泊施設「大乘苑」建設のための客土層、調査区北端にあるテニスコート面とこれにともなう石炭殻層、灰黒色粘質土層、暗橙褐色砂質粘土による整地層、灰黒色砂質土層、橙褐色粘土あるいは青灰色粘土による西小池埋立て整地層、池内堆積土、池底(地山)となる。また、池底において池に先行する複数の遺構を検出した。

テニスコートは、当初昭和3年に造成され、昭和20年奈良ホテルが米軍の接收を受け、レクリエーション施設となったのちに再開、昭和80年代まで存在していた。第336次調査では、防空壕を埋立てた上層で確認されたことから後者の時期に比定している。

灰黒色砂質土層は、厚さ5cm未満のきわめて薄い土層であるが、石筆片が大量に出土し、飛鳥小学校時代の生活面と考えられる。硯などの文具は、青灰色粘土層中からも出土しているが、前述の経緯からすれば、西小池の面的な埋め立てと整地は、明治16年の飛鳥小学校建設にともなっておこなわれた可能性が高い。このことは、ヲシマSX8770の残存する最高所が灰黒色砂質土層のレベルと一致することからもうかがわれる。

池内堆積土は、植物質の腐植土を主体とするもので層厚は15cm前後ときわめて薄く、複数の層を形成するような堆積は認められない。以上のことから、調査区内の堆積層はほとんどが西小池の廃絶以後のものであることになる。

検出遺構

調査は、複数の遺構を検出した近代の遺構面(暗橙褐色砂質粘土上面)で遺構検出、平面実測、写真撮影等の記録ののち、これを掘りさげ、西小池にともなう遺構面を最終的な検出面とした。

検出した遺構は、大きくA 西小池以前の遺構、B 西小池(南池)とこれにともなう遺構、C 西小池の埋立て以後の遺構、に区分される。

A 西小池以前の遺構

西小池の池底および小池にともなう造出しSX8774、岬SX8775に重複して検出した遺構。

SD8780・SD8781・SD8782 造出しSX8774の下層で検出した3条が並行する東西素掘溝。幅30~110cm、深さ10~20cm、長さ5.5m以上。暗灰褐色の砂質土により溝が埋まった上にSX8774の護岸石が据えられる。南のSD8782からは平安時代の軒平瓦(興708)が出土した。

SD8783 調査区の南部で検出した東西素掘溝。幅30~90cm、長さ5.5m以上。黒褐色の混礫土で埋まり、その上に岬SX8775の護岸石が据えられる。

これらのほかに、複数の土坑を検出した。

B 西小池とこれにともなう遺構

西小池南池SG7651 当調査部では、西小池地区の調査にあたり、前述の絵図を参考に、メシマを中心とする北の池を「北池」、ヲシマから連リハシにより結ばれた小島群から西側の部分を「中池」、それより東側および南の池を「南池」と便宜的に呼び分けている(図167)。

今回の調査では、第310次調査で検出した西小池南池の北部を検出した。第336次調査で検出した北池と同様に地山を削りこんで造られており、池底の周囲には護岸の木材が据えられている。地山が礫層となるところではこの礫を池底の石敷きにみだてている。池底の標高は89.5m前後。後述するヲシマ・岬の高さを考えると、水深は20cm程と推定される。北岸は広い範囲で削平を受けていたが、本来は勾配の急な崖状であったと考えられる。東岸も、池底からの比高差が1m程認められた。なお、築山SX7829の南裾にある平場において、東大池と西小池を結ぶかたちで東西方向の断ち割り調査をおこなった。西小池東辺よりも約3m東で、ゆるやかに西におちる肩を確認し、このことから西小池は盛土造成により汀線を西に移動させ勾配をつけたことが判明した。

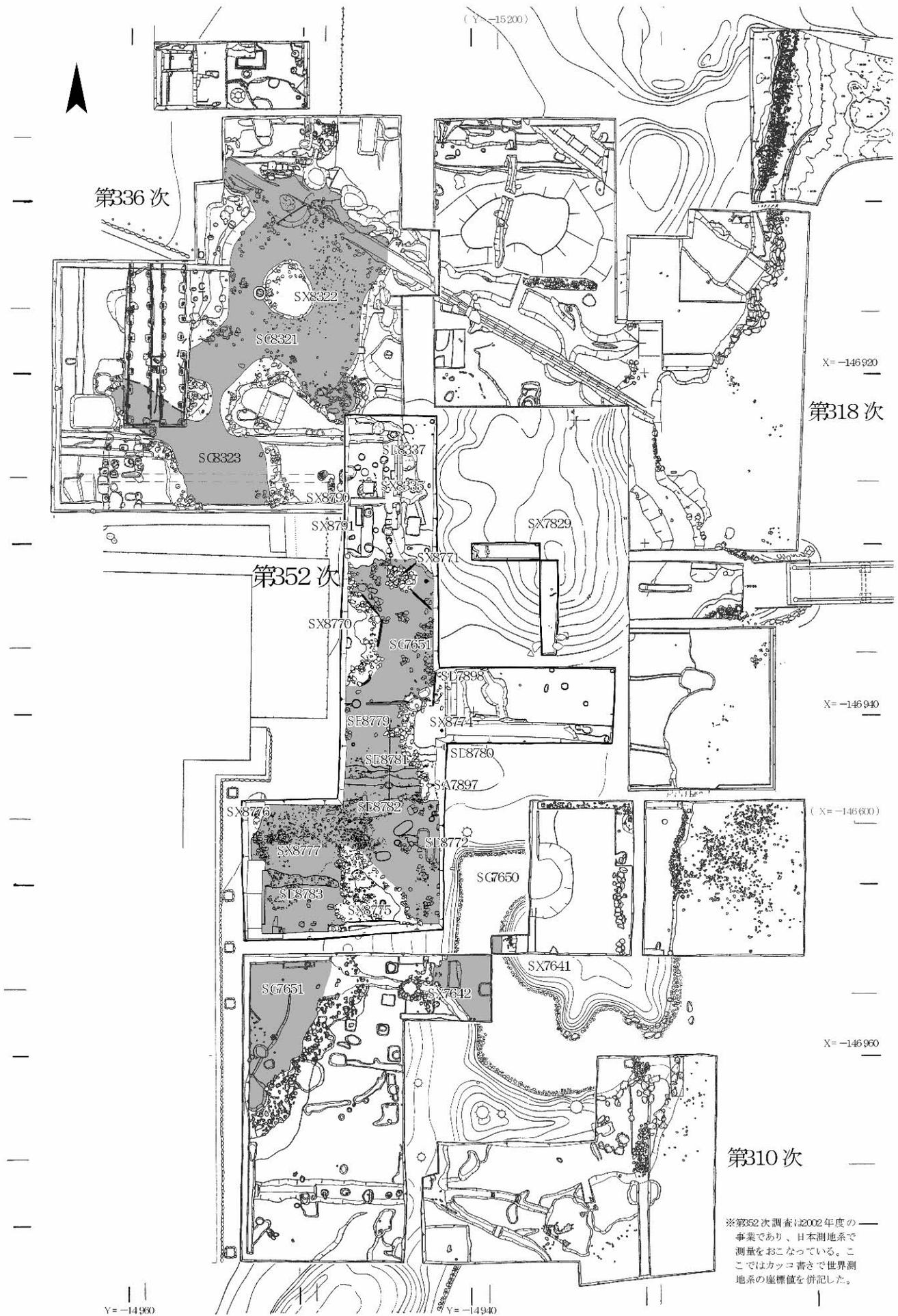


図168 第352次調査および周辺の調査(第310次・318次・336次)遺構平面図 1:300

ヲシマS X8770 『真景図』に「ヲシマ」と記された中島の東辺部を南北6 m、東西2 mの範囲で検出した。池底から確認した頂部までの高さが40 cm、半球形に地山を削り残してつくられており、周囲には石組がみられる。基底部の周囲には石や土を押さえるための木材を平面が多角形になるように据え、その材を2本の細い杭で挟むようにしてとめていた。

岩島S X8771 南池の北端で約2 mの範囲に石の集中する箇所を検出した。基底部には池岸から護岸と同じ材が組み立てられ、岩島状のものがあつた可能性がある。

方形造出しS X8774 南池の東辺において南北6 m、東西2 mの方形の張り出し部を確認した。『庭苑圖』にみられる汀線のありかたと一致する。

流路S D8772 東大池と西小池を結ぶ流路。第310次調査で東西の石組護岸SX7641・SX7642を確認している。

岬S X8775 東大池と南池をつなぐ流路SD8772の西岸では、南北4 m、南端で幅4 mの範囲で地山を削り残した嘴状の高まりを確認した。周囲に護岸石を据え、西側基部にはわずかな造出しと踏石状の平石がみられる。また、頂部では柱穴1基を検出した。

小島S X8776 ヲシマから南に連なる小島(もしくはその対岸部に相当)の一部。縁まわりの石組に加えて東縁には直径4 cm程の白い玉石が撒き敷かれていた(SX8777)。

S B8779 池底で石上に据えられた直径10 cm前後の丸太柱材を3ヶ所で確認した。いずれも高さ15 cmほどに切断されており、縁束状のものが埋め立ての際に切断された可能性がある。

築山S X7829 西小池と東大池の間にある築山状の高まり。植栽を保護するためL字形のトレンチを南半部に設けた。頂部で厚さ約1 mをはかる明褐色土の盛土がなされており、築山の南半部は、現状よりもかなり低平なものであったことが判明した。盛土の下部からは、完形に近い室町時代の土師器皿が出土している(図78 1~3)。また、南裾に石材のまとまる箇所があり、築山に上がるための石段など何らかの構築物かと思われたが、据付けられたものではないことが判明した。

西小池埋め立て以後の遺構

暗橙褐色砂質粘土上面で検出した遺構、およびこれに関わる遺構。

S X8790 漆喰による長方形の流し状遺構。東西40 cm、

南北120 cm。SX8791 埋立て後につくられる。

埋甕遺構S X8791 東西80 cm、南北3 mの長楕円形平面の両端に口径55 cmの瓦質の甕を据え、周囲上面に舟底状に漆喰を貼る。甕にはともに塊石が落とし込まれていた。第336次調査で検出したSX8335と一連のものか。

水場状遺構S X8792 外側に面を揃えた石で縁をとり、中に漆喰を貼った方形の水場状遺構。東西1.8 m、南北1.5 m以上。

埋設遺構S X7894・S X7895・S X7896 調査区南半で検出した樽(SX7894・SX7895)、木箱(SX7896)の埋設遺構。

杭列S A7897 調査区南半東壁にそって確認した枕木などをもちいた南北方向の杭列。現在、東大池から鍵手状の入り江として認められるSG7650は、岬の東辺を流れ東大池と西小池を結ぶ流路SD8772を、埋め立てて現状のように改変したものと考えられ、その際の土留めであろうか。枕木をもちいた杭列は、北端のSD8337内においても認められ、鉄道院所有との関係をうかがわせる。

南北溝S D7898 SA7897の西辺に沿って検出された南北溝。暗橙褐色砂質粘土を掘り込む。埋土から物差し1点を含む木簡6点が出土した。

(次山)

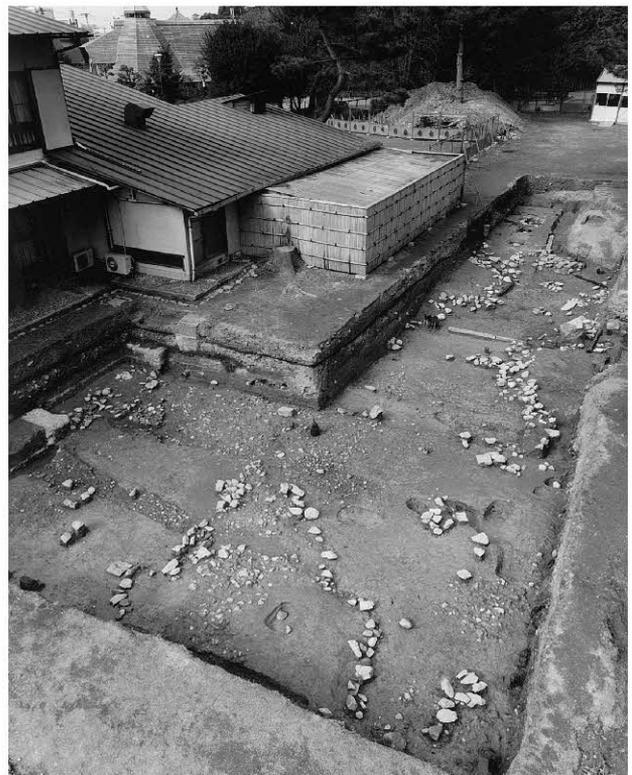


図169 第352次調査 調査区全景(南東から)

4 第365次調査

第365次調査は、東大池の西北隅(北区)と西南隅(南区)を対象に、2003年10月1日に開始し、12月24日に終了した。調査面積は北区が約218㎡、南区が約170㎡の合計約390㎡である。本調査は、東大池の周辺を対象にした最後の調査で、これまでの調査成果とあわせて、東大池沿岸部分の変遷を明らかにすることを主たる目的とした。また北区では、調査区の大部分が陸地部分にあたることから、今後おこなう御殿跡地の調査につながる調査成果も期待された。

この他に、東大池東岸で市道沿いの植栽工事にもなる事前調査をおこなった(東区)。幅2.5mのトレンチを3ヶ所に設けて調査した結果、市道沿いは現代の造成土が厚く盛られていて、植栽が遺構面に影響しないことを確認した。

北区検出遺構

北区の基本的な層序は、表土および近現代の整地土の下に、ややしまりの良い砂質土層が、橙褐色土、茶灰色土の順につづき、その下に淡黄色の粘質土層が厚く盛られる。これらは中世後半～近世の整地土層であり、この下には中世の遺物を含む暗褐色の粘質土層がある。

今回の調査では、中世後半～近世の各整地土上面で主な遺構を検出した。ここでは便宜的に、中世の遺構をⅠ期、中世後半～近世の遺構をⅡ期、近代の遺構をⅢ期と区分する。このうちⅡ期を、さらに3時期に細分し、それぞれ時代順にⅡ-1～3期、と呼ぶ。

Ⅰ期(中世)

調査区の中央を斜めにはしる明治時代の暗渠SX7843の掘形で、近世の整地土層の下にひろがる暗褐色の粘質土層を確認した。この粘質土層は20～50cmの厚さで、上面はほぼ水平を呈し、その標高は90.1m前後である。これと同じ土層は、調査区西半の断ち割りでも確認しており、北区全域の下層に広がっているものと推察できる。第318次調査では、この土層を池底の堆積層と推定し、中世には東大池が現況より西北に張りだしていたとする。今回の調査では池の堆積層である確証は得ていないが、少量ながらも出土した火舎やすり鉢などの土器片は室町時代のものに限られる。

Ⅱ期(中世後半～近世)

〈Ⅱ-1期〉淡黄色土の上面で検出した遺構群。隣接する第318次調査および第336次調査の遺構検出面にあたり、出土遺物から中世後半～近世初頭に造成された整地面と考えられる。この面では多数の遺構を重複して検出しており、以下に主なものを示す。

S D8570・S D8571 調査区の西半で検出したL字形の礫溝。このうち南北溝をSD8570、東西溝をSD8571とする。SD8570北端とSD8571西端を接続し、SD8571東端はSX7843に壊される。SD8570南端は、調査区の西南隅に拡張区を設定して調査した結果、南壁付近でとぎれることを確認した。用途は不明だが、その構造からは庭園内の水はけを改善する地業とも考えられる。下部に粗砂が堆積し、その上面に礫を詰めた構造で、礫上面の標高は89.9m前後とほぼ水平を示す。溝の幅は礫上面で40～60cm、



図170 礫溝S D8570・S D8571(北から)

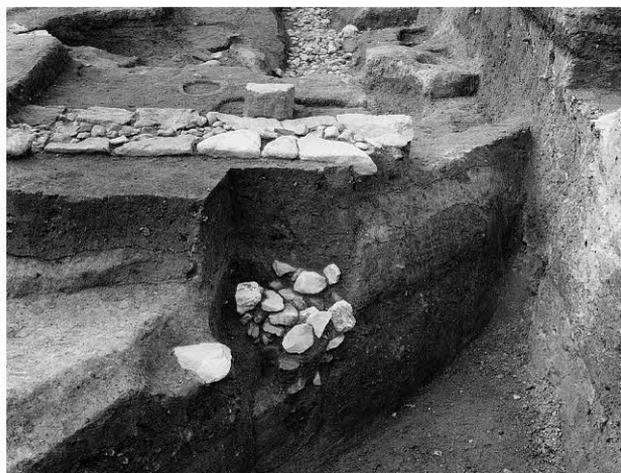


図171 礫溝S D8571と石列A8564(東から)

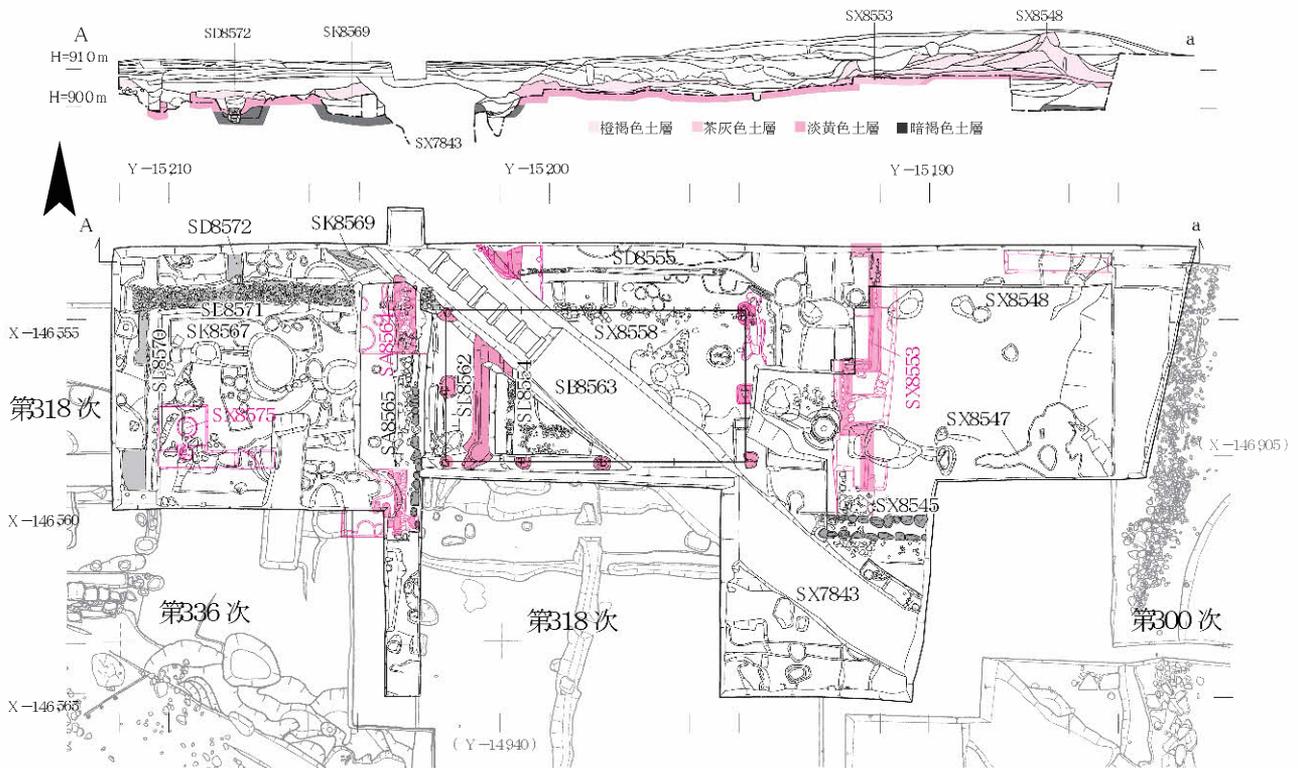


図172 第365次調査北区 遺構平面図・断面図 1:200

溝の深さはSD8570の南端では礫上面から約30cmであるのに対し、SD8571の東端では約80cmと急激に深くなっている。溝底の標高から判断すれば、SD8571は南北溝SD8562に接続する可能性が高い。埋土には中世から近世にかけての遺物を含み、礫上面では赤土器・白土器と呼ばれる中世の土師器片が多く出土している。

SD8572 東西溝SD8571の中ほどに、北から合流する礫溝。幅約50cm、深さ約80cmの溝に約40cmの厚さで礫を詰め、合流部には20cm大の見切石で区切る。礫上面の標高は東西溝SD8571と同じく89.9cmだが、構造は大きく異なり、下部に直径15~20cmの大粒の礫を詰めたのち、その上を細礫で覆う。

SD8562 調査区の中央にある南北溝。幅は約1m、深さは南壁ぎわで約40cmだが、北壁ぎわは約90cmと急激に深くなる。溝底には灰白色の粗砂が厚く堆積する。

SX8575 調査区の西南隅、礫溝SD8570の東岸にある埋甕。底部に白色の粘土を充填する。室町中頃と思われる瓦質の甕を用いており、遺構の重複関係からみても、II-1期の中でも早い時期の遺構となる。

SK8567 調査区の西半、礫溝SD8570の南岸にある土坑。東西約4m、南北約1mの長方形で、深さは約30cm、底に10cm程の厚さで暗青灰色の粘土を敷き固める。遺構の重複関係からはII-1期の中でも早い時期と考えられるが、粘土上面からは陶器片など近世の遺物が出土している。

SK8569 調査区西半の北壁ぎわで検出した土坑。中世の土師器片(白土器)が多量に出土した(図78-4~11)。
SB8563 調査区の中央で検出した東西約8m・南北約4mの掘立柱建物。桁行4間・梁行2間で、柱穴内に礎盤石を置く。庭園施設としては簡素な建物が想定されるが、用途は不明。西北隅の柱穴は礫溝SD8571を掘り込んでおり、これより新しいことがわかる。南側柱穴は、第318次調査で検出したSX7825に該当する。

<II-2期> 茶灰色土の上面で検出した遺構群。層位的な関係から、時期は近世中期~後期にあたり、『真景図』が描く時期と対応すると考えられる。『真景図』では御殿の北端に「含翠亭」、西小池北岸に「閑眠亭」を描き、東大池北西岸はこれらの露地として描かれる。

SX8558 調査区中央で検出した瓦敷面。約60cmの幅で平瓦を東西に敷き並べる。瓦の上面を揃えて並べることから、露地に設けた園路の一部と考えられる。

SD8554・SD8555 幅10cm、深さ15cm程の溝に瓦を割って詰めた暗渠。側面には瓦を小端立てに並べる。周辺の水はけを改善するための湿気ぬきであろう。このうち南北暗渠をSD8554、東西暗渠をSD8555とした。

SX8553 調査区の東半、II-2期とII-3期の整地土の間で検出した南北にのびる帯状の遺構。黄漆塗で固めた堤を鉤の手に配し、その西側に瓦を小端立てに並べる。堤と瓦の間には板材の痕跡も確認できる。庭園施設の周縁部と考えられるが、詳細は不明。植栽樹の痕跡か。

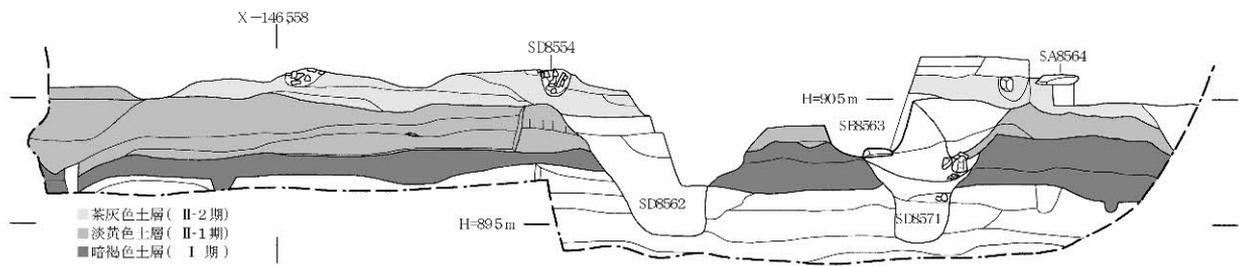


図73 北区 SX7843 掘形南壁 土層図 1:60

〈II-3期〉 橙褐色土の上面で検出した遺構群。遺構の検出状況から、大乘院が廃絶となる明治初年までの時期、すなわち近世末期と判断できる『境内図』が描く時期と対応する。

S A8564 調査区の中央で検出した南北の石列。約30cm大の石を外側の面をそろえて2列に並べ、その構造から築地塀の基底部分であることがわかる。拡張区を設けて南端を確認したところ、東西石列SA8545に接続するように鉤の手に曲がっており、一連の築地塀であったと考えられる。整地ののち石列SA8565に造り替えられる。

S A8545 調査区の南張り出し部で検出した東西の石列。構造は南北石列SA8564とほぼ一致する。暗渠SX7843に壊されるが、本来は石列SA8564に接続していたと考えられる『境内図』に描かれた鉤の手におれる築地塀の一部であろう。

S X8547 調査区の東半、東大池に急激に落ち込む岸上で検出した黄白色の叩き漆喰面。同様の漆喰面は東大池東岸部の調査でも検出している。今回の検出遺構は、その形状や遺構の重複関係から判断して、近世末期の園路とみるのが妥当であろう。

S X8548 調査区の東半、東西石列SA8545の北側で検出した築山状の高まり。II-2期の整地土上面に積土を層状に重ねて、高さ約70cmの高まりを作る。『境内図』では築地塀の北側に樹木が生い茂った築山を描いており、これに相当するものと考えられる。

III期(近代)

明治初年(1868)以降、奈良ホテルが開業する明治42年(1909)までの遺構。

S A8565 調査区の中央、南北石列SA8564に重なる位置で検出した南北の石列。約20cm大の石を東面をそろえて1列にならべる。西側に控え柱の柱穴があり、板塀の基礎であることがわかる。下層の石列SA8564との間に、近世末期頃の瓦片を多く含む廃棄土層SX8561をはさむ。明治時代に宅地と旧庭園地を区切るために設けた区画施設であろう。

S X7843 第318次調査で検出した東大池の排水用土管暗渠。東大池西北部分に煉瓦製の排水口があり、現在も機能している。明治20年代の荒池造成にともなって東大池の北側に開削された掘割は、オーバーフローを東大池に流し込むように計画されており、この暗渠もこの時に埋設されたものと考えられる。今回検出した遺構面は、すべてこの暗渠に壊されることから、北区における整地土層の造成年代の下限が知られる。

南区検出遺構

南区の基本的な層序は、青灰色粘土の地山上に数層の造成土を積み重ねて池岸を形成する。岸の上は近現代の造成土および攪乱土がうすく覆い、池の中は地山直上に暗青色土が堆積する。池岸の造成土は下から順に、青灰褐色土、灰褐色土、橙褐色土、の砂質土層に大きく分けられる(図74)。

今回の調査では、近現代の造成土および攪乱土、池底の堆積土を除去した状態で、主な遺構を検出した。また、池岸を断ち割るトレンチを数ヶ所に設け、岸の積土の状態を確認するとともに、下層で地山直上に広がる礫敷面を確認した。以下、中世以前の遺構をI期、近世の遺構をII期、近代の遺構をIII期と区分する。

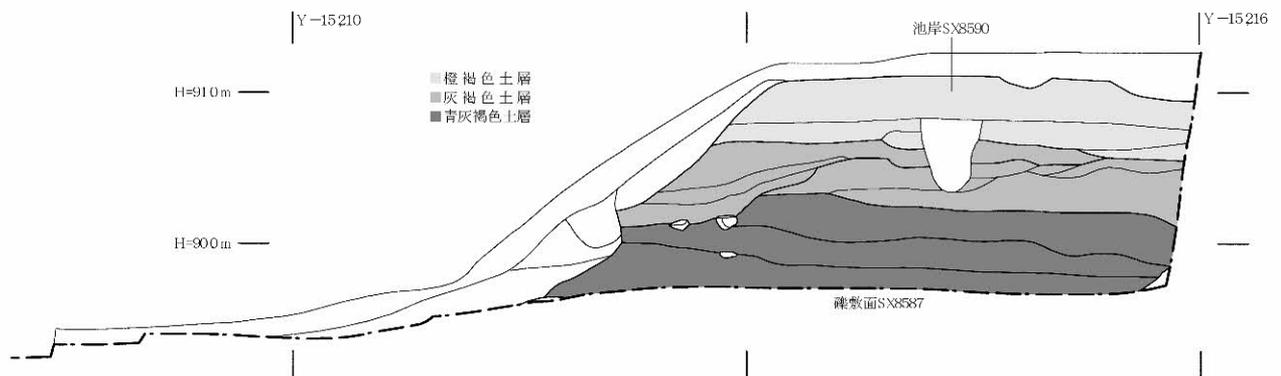


図74 南区 東大池西岸 土層断面図 1:50

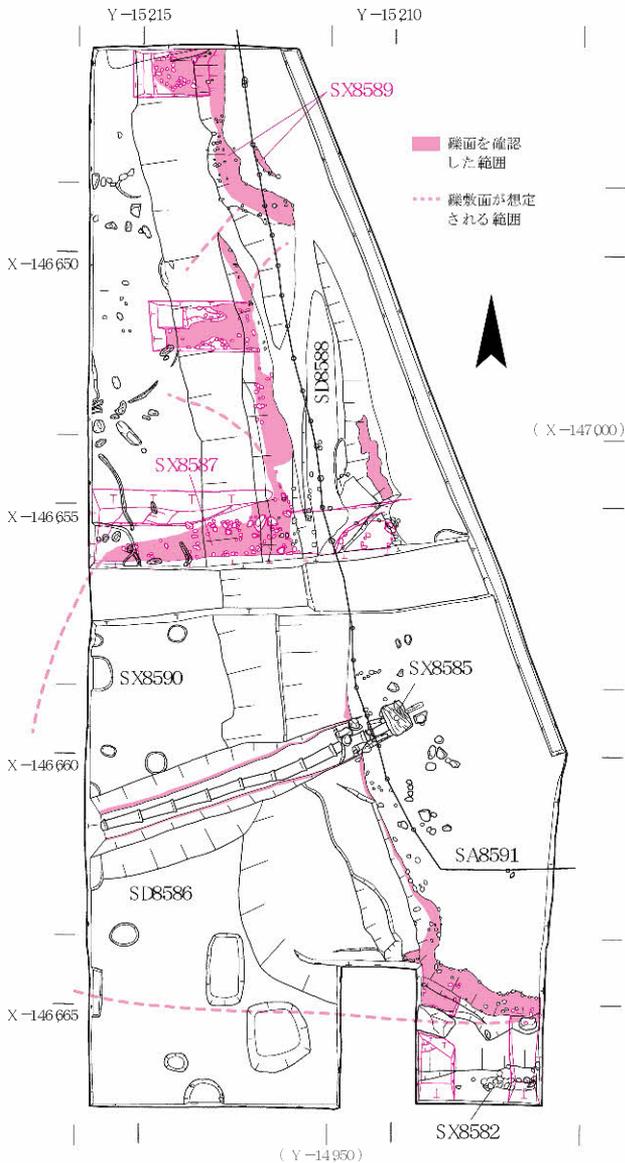


図75 第365次調査南区 遺構平面図 1:150

I期(中世以前)

SX8587 近世の東大池岸SX8590を断ち割ったトレンチの最下層で検出した礫敷面。調査区の南半で西に大きく張り出して、入江状の洲浜を形成する。地山直上に5～15cm大の礫を敷き並べており、礫上面の標高は89.7m前後とほぼ水平を示す。礫敷面の直上は堆積土とみられる暗青灰色の砂質土でうすく覆われていた。礫敷面の東端は汀線の位置に広範囲にわたり露出していて、礫敷面が東大池の池岸西南部に広く存在することが推察できる。さらに調査区の北半では、礫敷面が断面をみせるようにしてとぎれる様子を確認できる。このことは、かつて北東方向にのびていた礫敷面を切り込んで東大池西岸を新たに造成した可能性を示唆しており、天神島を東大池西岸から削り出して造成したとする第336次調査の所見とも矛盾しない。礫上面および堆積土の中からは11世紀末～12世紀初頭とみられる土器片が出土した(図78-12～14)。これが礫敷面の時期を示すとすれば、大乘院庭園に先立つ庭園の遺構として注目される。



図76 礫敷面SX8587(北西から)

II期(近世)

SX8589 調査区の北半にある地山起源の礫層を削り出した礫面。汀線の位置に露出して礫敷の様相を呈する。
 SX8590 橙褐色土を最上層として造成された東大池の西岸。橙褐色土を掘り込む暗渠SD8586に明治5年製の土管を使用しているため、これを近世の造成土と判断した。橙褐色土層は40cm程度の厚さがあり、上面の標高は91.1m前後とほぼ水平を示す。岸は45度弱の急勾配でおちこみ、標高90m付近に侵食でえぐられた跡がみられる。この侵食痕により、池の水位を標高90m前後とする従来の所見が裏付けられた。

SX8582 調査区の東端、岸上にある約15cm大の石を乱雑に並べた石組『境内図』ではこの部分に長方形の敷石を描いており、この地固め石の可能性が考えられる。
 SD8588 調査区の中央、岸下にある南北溝。方位はほぼ南北の軸に沿う。残存状況が悪く詳細は不明だが、近世の護岸に関わる遺構の可能性も考えられる。

III期(近代)

SD8586 池水を外へくばる土管暗渠。取水口SX8585から南西にくだる。明治5年製の土管(図77)を使用することから、掘削時期は明治初頭の可能性が高い。

SX8585 暗渠SD8586の東端に取り付く樋門。直径約60cmの丸太(二葉マツ)を刳貫いたもので、上面と正面の2ヶ所に取水口を設けて栓でふさぐ。樋門の標高は約89.6m、通常は上面の栓を抜いて取水し、水位が低い時や樋門の泥を抜く時に正面の栓を抜いたらしい。

SA8591 池の中を岸に沿って並ぶ杭列。重複関係から暗渠SD8586より新しいことがわかり、暗渠の設置後に岸を補修した時のものとも考えられる。(金井)

表24 第352次調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦	
型式	点数	型式	種 点数
623Ⅴ(興4)	1	6661	D 1
中世巴	1	古代	1
興280	3	興708	1
近世巴	3	鎌倉	1
近世小型菊丸	4	中世	2
近世小型菊丸	2	近世	4
近世	1	近世後半	7
近世後半	1	軒棧瓦 刻印付1(点含)	3
隅軒丸	1	型式不明	1
型式不明	2		
軒丸瓦計	19	軒平瓦計	21
道具瓦他			
鬼瓦	1	面戸瓦	1
割熨斗	3	丸瓦スタンプ	1
	丸瓦	平瓦	磚他 凝灰岩
重量	31.7kg	214.3kg	3.2kg 23.7kg
点数	206	1561	5 40

5 出土遺物

瓦磚類

出土した瓦磚類の一覧を、次数ごとに分けて表に掲げた(表24・25)。このうち、興280・282・409・851・860は近世、興708は平安時代の瓦である。

第352次調査で出土した瓦は近世のものが大半を占めており、中でも小型菊丸の出土率が高い。これらは大棟の棟飾りとして用いられるものである。なお、6661Dは飛鳥寺や元興寺に特有の瓦であるため、大乘院移転以前の元興寺禅定院に関連する可能性がある。

第365次調査で出土した瓦は北区から出土したものがほとんどで、近世以降のものが大半を占める。多様な種類の瓦が出土しているのも特徴で、組棟に用いられる菊丸や輪違いなどの棟飾りや、塀に用いられる角棧瓦が出土している。また、熨斗瓦の中には滑り止めのカキメが施されているものがあるが、これらはおそらく明治以降のものと考えられる。このほか、「大日本大阪横山製造」の刻印をもつレンガが出土しており、同様のものが第336次調査においても確認されている(『紀要2002』)。

土管

暗渠SD8586に使用されていた常滑産の真焼土管で、全体に暗赤褐色を呈する。全長66.7cm、ソケット外径23.4cm、筒部外形18.4cm、内径16.0cmを測る。ソケット部は内外面ともヨコナデで整形され、筒部は外面がタテナデ、内面は1～2条の細いタテナデを除くと基本的に未調整で、全面に離れ砂が付着している。このことから、筒部は型に粘土板を巻き付けて成形され、型から取り外した後に、内面の合わせ目のみにタテナデが施されたと考えられる。また、筒部内面中央のヨコナデ部分を境にして上下でタテナデの位置が異なることから、2本

表25 第365次調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		軒棧瓦	
型式	点数	型式	点数	型式	点数
鎌倉巴	2	平安	2	近世	3
室町巴	1	鎌倉唐草文	1	スタンプ付	1
中世巴	1	室町唐草文	2	近世後半	1
中世菊丸	1	室町後半唐草文	1	近世	2
中世	2	室町菊花文	1	軒棧瓦計	7
興280	1	室町	2		
興282	1	中世唐草文	1	道具瓦他	
興409	1	中世	1	鳥窩(巴文)	2
近世巴	21	興851	1	鬼瓦	2
近世前半巴	10	興860	1	輪違い	3
近世後半巴	7	近世唐草文	2	角棧瓦	30
巴	3	近世蓮華唐草文	5	角棧伏間瓦	2
小型菊丸	4	近世無文	1	熨斗瓦	11
近世	1	近世	5	箱熨斗瓦	3
近世後半	6	近世前半	4	面戸瓦	5
型式不明	6	近世後半	2	文字付平瓦	1
		型式不明	4	スタンプ付平瓦	1
軒丸瓦計	69	軒平瓦計	36	スタンプ付丸瓦	1
	丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩・レンガ	
重量	98.1kg	549.9kg	21.4kg	3.5kg	
点数	840	4383	33	10	

の筒を接合して成形したと考えられる。ソケット部も筒部に接合するかたちで成形されている。(林 正憲)

中野晴久氏(常滑市民俗資料館)の御教示によれば、この土管は、英国人土木技師・R.H.プラントンの依頼により、常滑の製陶業者・鯉江方寿が横浜居留地の下水道用として明治5年(1892)に製造したものである。2万本ほど製造して横浜に納入したが、規格外との理由で全数不合格となり、実際には使用されなかった。不合格となった土管は横浜周辺の資材商に払い下げられたといわれ、東京の新橋停車場跡地では、近年この土管がまとまって出土して話題になった。一方、鯉江はこれを機に土管の改良をはじめ、翌年には新式製法の土管を開発、これが全国に普及する近代土管の原形となった。

このように、この土管は近代土管の試作品ともいえるもので、その使用は本格的な近代土管が普及する以前の明治10年頃までと推察できる。土管製法の転換点を示す考古資料として重要だが、今回の近畿地方での出土は、近代化の道を邁進していた明治初頭の日本の物資流通を知る上でも貴重な発見であろう。(金井)



図177 暗渠SD8586 常滑産の真焼土管

土器・陶磁器類

両次の調査を通して整理用コンテナにして29箱分ある。それらの所属時代は奈良時代から現代におよぶが、出土量の大半は、近・現代の陶磁器である。平安時代前期以前の土器は少量で、かつ調査区全域に散在する傾向を示しているため、ここではまとめて出土し、東大池およびその周辺の変遷段階を示す資料を示した(図78)。

1～11は室町時代の土器で、1～3は築山SX7829の盛土である明褐色土層下部、4～11は土器溜SK8569出土である。土師器皿の口径は7.5cm～14.0cmあり、口径からは少なくとも5規格が認められる。7はいわゆる赤土器、その他は白土器である。11は口縁部2ヶ所に補修孔があり、底部外面には、針描きが認められる。

12～17は東大池西岸SX8590の断割調査で出土した土器である。12～14は大乗院園池に先行する園池の堆積層である暗青灰色砂質土層、15～17は東大池の西岸築成土である青灰褐色土から出土した。土師器小皿12・13の口径は10.5cm前後、器高は2.0cm前後、大皿14・15の口径は15.5cm前後、器高は、3.3cm前後となる。瓦器小皿16、瓦器椀7は、見込みにジグザグ文が施されている。これらの土器は、平重衡による南都焼き打ち(1180)の後に再建された興福寺大御堂鎮壇具埋納土器よりも先行するものであるため、瓦器椀や土師器皿の形態や調整手法から、12世紀前半の年代が推定される。

18～22は平安時代前期のもので、各包含層出土。18は黒色土器A類椀、19～21は緑釉陶器である。22は白磁椀の底部小片で、釉色はややくすんでいる。定窯あるいは邢窯の製品と考えられる。(川越俊一)

飛鳥小学校関係遺物

第352次調査では、飛鳥小学校時代の遺物として、石筆・石盤・硯などの文具が池の埋立て層およびその上の灰黒色砂質土層から多量に出土した。このことは、当初西小池の西側にあった旧内御殿・東林院殿を校舎とし、新校舎も御所馬場に面した敷地西南部に建てられた歴史的な経過と対応する。特に、117点の出土をみた石筆はいずれも短く折れていることが特徴である。石盤・石筆がノートと鉛筆にその座を明け渡した大きな理由に、石筆が折れやすく使い勝手が悪かったことがあげられている。埋没時の破損もおおいに考えられるが、こうした事情を彷彿とさせる資料である。(次山)

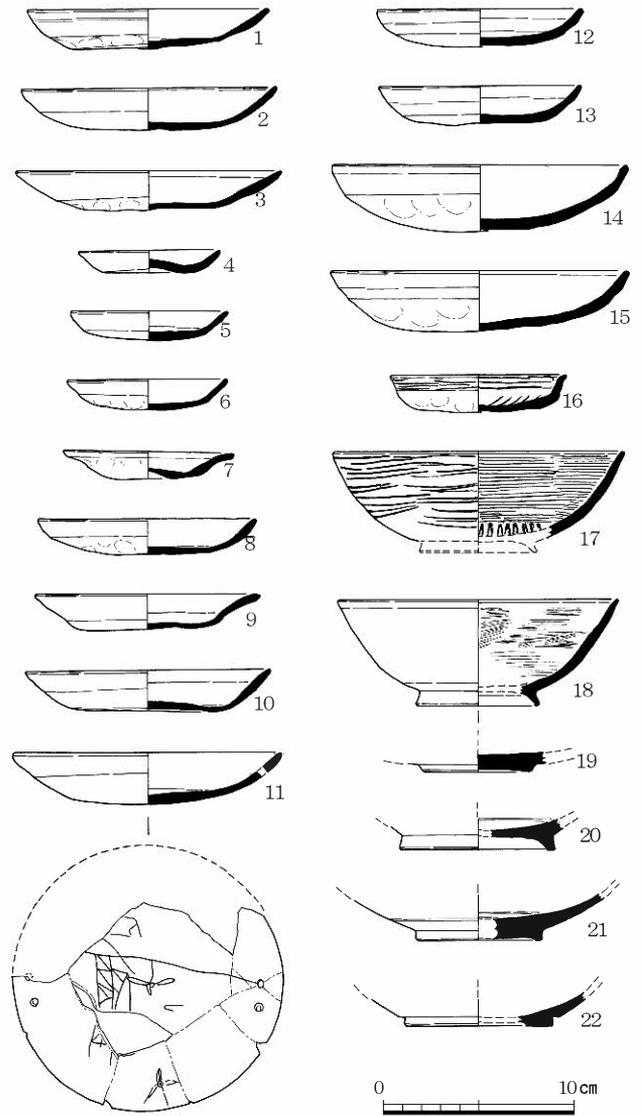


図78 第352次・365次調査出土土器 1:4

6 まとめ

(1) 第352次調査

調査の結果、西小池南池、ヲシマ、岬など事前に予測された遺構を、ほぼ予測された位置で検出し、西小池の復原にあたり平面図である『庭苑圖』の資料としての正確さをあらためて確認することとなった。

ところで、森蘊は、西小池を含む敷地西南部の様子について『真景図』や現況に照らして復元図を描いた『中世庭園文化史』奈文研学報第6冊(1959)。その状況の類例を江戸時代初期の庭園遺構に求め、「三個の中島を石橋で連絡しつつ出島状とし、筋違いに州浜を突出させている

姿は、あたかも桂離宮庭園景観中の白眉とされる松琴亭前面の天橋立と、州浜一带に酷似しているのに気がつき、驚き入ったのである」と記している。

今回検出したヲシマSX8770、小島SX8776、および岬SX8775を含む西小池の景観と各遺構の配置は、桂離宮の天橋立と州浜のありかたに近似しており(図79)、森のこの予察を裏付ける結果となった。大乘院庭園の作庭における意匠的な分野の研究に、貴重な材料をもたらしたものとしよう。(次山)

(2) 第365次調査

陸上部分の変遷 北区では、中世から近代にいたる各時期の整地面を層位的に確認し、大乘院庭園の造り替えに関する重要な資料が得られた。

まず、調査区全体に広がる中世の暗褐色土層を確認した。この土層は第318次調査でも確認しており、東大池の堆積土である可能性を指摘している。

次に、この上に積まれた中世後半～近世の整地土層を三層にわたって確認した。下層の淡黄色土上面では多数の遺構を重複して検出し、この場所が短い間に何度も造

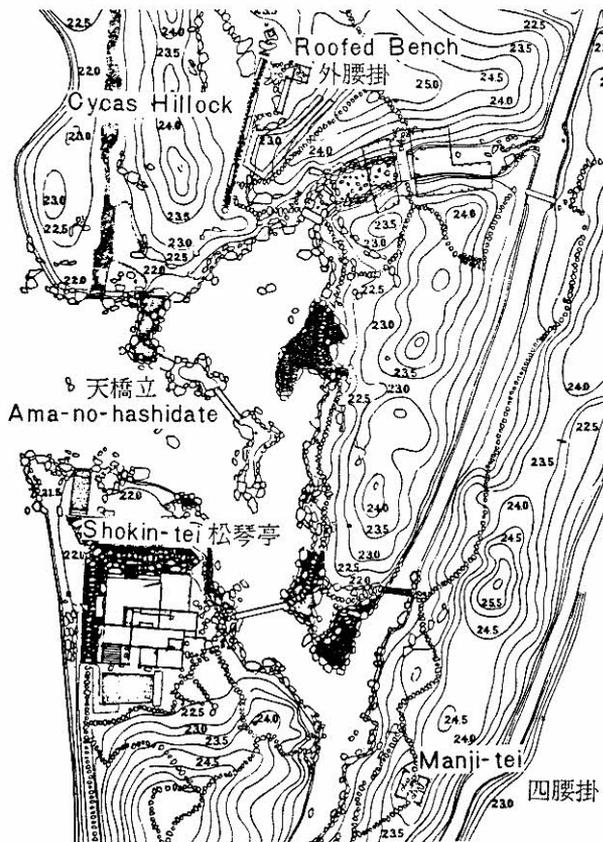


図79 桂離宮庭園実測図 部分 1:800
(『小堀遠州の作事』奈文研報第8冊 1966より)

り替えられた様子を伺い知ることができる。中でも礫溝SD8570・SD8571と建物SB8563は、近世初期の作庭手法を示す遺構として注目される。

中間層の茶灰色土層上面では『真景図』と対応する遺構を検出した『真景図』では、北区に該当する場所に露地(茶室に付属した庭)を描いており、瓦敷SX8558や瓦詰め暗渠SD8554・SD8555は、これに対応する造作と考えられる。

そして上層の橙褐色土上面では『境内図』と対応する遺構を検出した。『境内図』の北区に該当する場所には、鉤の手におれる築地塀と樹木に覆われた築山状の高まりが描かれており、東西石列SA8545および南北石列SA8564、築山SX8548の検出状況とよく合致する。

絵図の年代『真景図』および『境内図』は、これまで絵画技法の特徴などから『境内図』が近世中期『真景図』が近世末期の情景を描いたものと想定されてきた。しかし上述のように、遺構の検出状況からは『境内図』が近世末期『真景図』がそれ以前の姿を描いたことが推察され、絵画が描く情景の年代もこれに従う可能性を指摘できる。

東大池岸の造成過程 南区では、東大池岸の造成に関して、既往の調査成果を裏付ける資料を得るとともに、近世以前の遺構について重要な情報を得ることができた。

まず東大池の池岸が中世以来の積土によってしだいに高く造成され、近世末期には現況のような急勾配の岸辺となっていたことを確認した。このことは、これまでの調査で既に明らかにされているが、積土の造成年代については包含する遺物の年代から推定していた。今回の調査では、明治5年製の土管を使用する暗渠SD8586との重複関係から、最上層の積土が近世の造成である可能性を示すことができた。

また南区の南半では、積土の下に広がる礫敷面の存在を確認した。これにより、かつて東大池西南部は現況より西に張り出しており、入江状の洲浜を形成していたことが明らかとなった。近世以前の遺構については部分的な調査に止めており、洲浜の時期を断定するには至らないが、出土遺物からは11世紀末～12世紀初頭に遡る可能性が指摘できる。この時期には元興寺禅定院の伽藍がこの地にあったことが史料から知られ、この洲浜が禅定院の庭園遺構である可能性は大いにあろう。(金井)